

# イスラエル教育のナシヨナリズム

——イスラエル・ナシヨナリズムにおける Zionism と Judaism の関係をめぐって——

倉内史郎

## 目次

はじめに	三
(1) イスラエル教育の一般的事情	三
制度のあらまし	三
ヘブライ語による教育	三
普通小学校と宗教小学校	三
ユダヤ意識教育プログラム	一
(2) イスラエル青年の意識	四
ユダヤ教にたいするサブラの心情	四
ディアスポラのユダヤ人との連帯	四
(3) Zionism と Judaism の矛盾	四
思想的背景	四
ユダヤ意識教育の進め方	四

## はじめに

「イスラエル教育のナシヨナリズム」について、少しイスラエル教育の紹介傍々問題の所在などをあげてみたいと思いますが、主として、一つは私自身が一九五八年から九年にかけて、イスラエルに滞在しておったときに、初等学校から高等教育機関までいろいろ見る機会をえましたので、その見聞によるものと、それから、最近イスラエルの人が書いたもの、これは Kurzweil という人ですが、このものなどによって報告したいと思えます。

私の見聞してきて公に発表したものとしては、『ユダヤ・イスラエル研究』という日本イスラエル文化研究会という会で出している雑誌(年一回刊)に、これの一九六一年の号に「ユダヤ意識教育要項ほか」という題で報告しているのがありますが、それに加えてさきほどの Kurzweil という人が一九六四年に出しております。Modern Trends in Jewish Educa-

tion”という本に書かれていることを中心にお話しをしたいと思えます。この Kurzweil という人は、チェッコスロバキアで生まれたユダヤ人で、チェッコのプラハ大学で勉強し、ドイツのフランクフルトのゲーテ大学、さらにロンドン大学で勉強していろいろな学位を持っている学者です。この人はイギリスからイスラエルに移住したということですが、現在イスラエルの工科大学(テクニオン)の一般教養部の部長をやっている人で、この “Modern Trends in Jewish Education” と私の『ユダヤ・イスラエル研究』にのせた「ユダヤ意識教育要項ほか」、主としてこれらにもとづいてご報告いたします。

### (1) イスラエル教育の一般的事情

#### 制度のあらまし

はじめに、イスラエルのことはあまりよく知られていないので、教育制度の骨組みを説明しておいた方がよいと思えますので、全体としてイスラエルの教育制度がどんな風に構成されているのか、その中での今日のテーマの問題はどうかということを明らかにするわけですから、まずイスラエルの教育制度はどんな骨組みになっているのかを紹介しておきたいと思えます。

イスラエルの教育制度というのは、これは、小学校、中学校、高等教育機関という、どの国でもある教育の制度をもっておりますけれども、八・四制の教育の制度であります。初等教育が八年で、これが義務教育。そ

の上に四年というのは、これは普通課程の中等学校で、大学へ進学をするというようなことを主として考えているヨーロッパ型の学校の段階構成をもっているといえます。中等教育の段階では四年制といえますけれども、普通課程は四年制ですが、その他三年コース、二年コース等、職業課程ではいろいろな種類のものがあります。義務化されているのは、初等教育八年間で、中等教育は義務化されておりません。

普通のように、初等教育というのは六才から始めて一四才までの八年間なんですけれど、一四才から一八才までの中等教育、それからすぐ大学というわけではない。一八才になりますと、国民皆兵で男女共に軍隊へ行くということが義務づけられていまして、軍隊へ行く男子は二年半、女子は二年間兵役に服する。それを終って帰って来てから大学に入るといふこととなりますから、いくらか大学生の年令は日本の場合等から比べて高いということが出来ます。国民皆兵の制度をとっており、女子までも兵役に服するというのは、いうまでもなく、イスラエルをとりまくアラブ諸国との緊張関係が、圧倒的に人口の多いアラブの諸国にとり囲まれてわずか二五〇万程度のイスラエル国家の防衛という至上の要請がありまして、それで教育の制度もそういった変則的な制度をとっているというわけです。

この大学にかんじていえば、中心はエルサレムにあるヘブライ大学であります。その他、代表的な高等教育機関としては、この Kurzweil という人の所属している工科大学 (Israel Institute of Technology) という方を英語ではしておりますが、テクニオンとヘブライ語ではいっておりますこの工科大学、これはやはり非常にレベルの高い高等教育機関とされており、大学も学部によって修業年限が違っているということがあ

ります。しかしだいたい学士号を取るのには三年、修士を取るのには四年、工科大学は四年であります。

これが見たいの制度の骨組なんですけれども、義務教育の八年間というの、アジア・アフリカのさまざまな国にくらべてレベルの高い国だといっているのです。イスラエルという国は国の成立が一九四八年ですから第二次世界大戦後の新興国といえるわけなんですけれど、第二次世界大戦後に帝国主義国の植民地支配から独立したいいわゆる新興諸国は、教育の程度においては非常におくれていまして、というのは、植民地支配のもとで全く無学文盲のまま放置されておりましたから、なかなか教育の制度も、急には普及していない状況であります。アジア・アフリカの新興諸国にあっては一般にそういうことがいえるのですが、イスラエルの場合には、八年間の義務教育というのは、これは修業の年限からいっても、また実際の就学率からいっても、第一級のものといっているのです。アジア・アフリカの諸国の中では日本、韓国は非常に教育の普及の進んでいる国でありますが、それによく発達している処だといえます。

だいたい、アジア・アフリカの諸国では、義務教育年限というの四年か六年で、しかも実際の就学率というのは非常に低いのが一般でありますから、そういう点でイスラエルの場合は、いわゆる先進国並の教育の制度であり実質であるということができると思うのです。就学率は九五％を越えるといわれておりますから、ほとんど学校に来ているといっている状態です。

もう一つ特徴的なことは、幼稚園の段階で、三才から五才まで三年間の教育機関であります、その三年間のうち最後の一年、五才の時の幼稚園

の教育というのは義務づけられております。ですから幼稚園の教育も広い意味で教育ということに入れますと、義務教育は九年ということになります。五才から義務教育が始まるというわけです。五才から義務教育が始まるというの、今、世界ではイギリスとイスラエルとこの二つじゃないかと思えますが、その点で非常に注目される制度をもっているといえます。

幼稚園の教育を義務づけているのはどういう理由からかといいますと、いろんな理由があるので、一つ大きい理由としては、やはり人口が少ない、労働力が足りない、それで母親を労働に参加させるということ、その要請が強いわけにして、母親を育児の仕事からできるだけ解放するということ、そして社会的労働に参加できるようにと、そういう条件を作っていくという政策が一つあげられます。それからご承知のように、世界各地に散らばったユダヤ人がイスラエルに帰ってきているわけですが、新しく帰ってきたこの家庭というのは、いろいろな意味で落ちつかない不安定な状態にあるので、そういう不安定な状態から幼児を守ってやるという配慮があります。そういう特殊な事情があるわけです。特に幼児期の者に対する社会的な配慮をしてやらなければならないということですが。

それから親達はいろいろな国、世界各地に散らばって、それぞれの文化的な環境で大人になった親達であるわけですが、イスラエルに来て、そこにイスラエル国家の国民として統合されていく必要がある。そういうことのために、その措置の一つとして子どもを早くから教育して、子どもに対しては新しいイスラエルの文化的価値というものを、一様に与えていく。それを通じてばらばらの性格をもっているユダヤ人の新帰国者の家庭

に、ある程度の統合への一つの道を求めようという考え方もあるのです。これは、ある意味で今日の主題である「イスラエル教育のナショナルリズム」という面に関係があると思います。

ともあれ、ごく大ざっぱにイスラエルの教育の制度を、幼稚園から高等教育機関までひとわたりご紹介したのですけれど、概していえば、ヨーロッパの教育の制度をモデルにして、それによって形成されているという、そういう印象をもたされます。ですから、大学へ入学する試験等にしましても、中等教育修了資格認定試験という試験を通れば大学へ入れるということなどにもなっているのです。

### ヘブライ語による教育

それは制度の面ですけれど、一つイスラエルの教育全般を通じてとくに強調しておかなくてはならないことは、初等教育から高等教育に至るまですべてヘブライ語で教育が行なわれるということです。すべてヘブライ語で教育が行なわれる、これは一見あたりまえのことにきこえるかもしれませんが、じつは、ヘブライ語を用いるということは、これは、イスラエルの新しい国民意識形成の基礎として、とくに意識的に努力をしている面であるということをおげなくてはならぬと思います。

それはどういふことかといえますと、二〇〇〇年近く前に、ご承知のようにユダヤ人はパレスチナの土地から世界各地に散っていったわけですが、追放されて、ある者はアフリカの方へ行ったり、ある者はアジアの方へ行ったり、ある者はロシアの方へ行ったり、また、ある者はアフリカの

北の方を通過してスペインを経由してヨーロッパの方へ行ったり、また、ずっと時代が下がればアメリカにどんどん流れて行く人、この二〇〇〇年の方、ユダヤ人はあちこちに散らばったわけですが、その散らばって行った先々で、その土地の言葉を話すようになってしまったわけですから、自分達の昔の民族語であるヘブライ語というのは、これは日常の用語としては話さなくなってしまったのです。だから死語になってしまったわけです。これは、アメリカにいる日本人二世が、日本語を話さないのと同じようなことですが、それが二世・三世どころじゃなく数十世代も重ねているのですから、昔のヘブライ語というのはぜんぜん使われなくなっていて、行った先々の言葉で生活してきていたのです。

そういういろいろな国の言葉を話すユダヤ人がイスラエルに帰ってきて、そこで統一した国を造ろうというわけで、言葉の統一ということが、何よりも先決問題になりました。パレスチナの土地に帰ってこようという運動がさかんになってきたころから、ヘブライ語を復活させようという努力がなされまして、これは Ben Yehuda という人が、この現代ヘブライ語を、話すためのヘブライ語を作るのに非常に努力した人として知られておりますが、ともかく二〇〇〇年間話されなかった言葉を話すようにした、これは大変奇蹟的な出来事なのですけれど、今、そういう共通の言葉として新しいヘブライ語を皆に学ばせて使わせるということを始めたわけです。そうでないと、ロシアから帰って来た者はロシア語で話し、ドイツから帰って来た者はイディッシュ語（ユダヤ人が話すドイツ語方言）、またアメリカから帰ってきた者は英語でやっているというようなことではどうにもならないので、ヘブライ語を努力して共通語として使わせるというこ

とをイスラエルの国ではやっているのです。

従って教育の場面では、ヘブライ語を徹底的に教えるし、そして、それを使うし、とくに高等教育の場合はむつかしい問題がありまして、大学のプロフェッサーも世界各地に散らばっていたユダヤ人のプロフェッサー（ユダヤ人には比較的学者は多いようですけれど）をイスラエルに呼びもどして、そこで教育・研究にあたってもらうのですけれど、そういう人でも、ヘブライ語を話せないと任用されない。もう、しゃにむにヘブライ語を覚えなければいけないということを課しまして、それでヘブライ語をマスターしてから、大学で教育にあたるということになります。ちょうど、これは他のアジアとかアフリカの新興諸国の大学などで、ここでは教授が外人であって、英語やフランス語で高等教育が行なわれているという国々が随分あるようですけれど、イスラエルでは、そういうことはしない。イスラエルでは、初等教育から高等教育まで、通してヘブライ語で教育をやるということですよ。

実際に、帰国してくる新しい人々に対しては一定期間ヘブライ語を訓練する施設（ウルパン）がありまして、そこに宿泊させて二〜三カ月ヘブライ語の訓練をして、それから社会生活に入れて行くというような手続きを取っております。ヘブライ語を使えないとイスラエルでの社会生活が非常に不便であり、就職をするのにも具合が悪いというような状態にまできているのです。ただ何といっても、これまで住んでいた所の言葉で話すというのが話しやすいものですから、ロンドンから帰ってきた人は家庭に帰ると英語で話す、というようなことはしばしばあるようです。それから、やはりもとの言葉の方が使いやすい、わかりやすいというので、本屋などに

行きますと、店頭には実に多くの国の言葉で印刷された雑誌なり新聞なりが置かれています。十カ国語或いはそれ以上のいろいろな種類のものが、需要数からいえばそんなに多くないはずなのですが、それだけ用意されております。ですから、ヘブライ語を表向きは使いながら、かなりまだ帰国前にいた国の言葉というものも使っているという感があるのです。

生活においてはそうですけど、教育においては、ヘブライ語の使用ということですと通して行く、これなど、言語の共通性というのが民族形成のための基本的な条件でありますから、やはりイスラエルにおける教育のナシヨナリズムを最も端的に表わすものの一つということができるのではないかと思えます。ですから、教育を通してヘブライ語を徹頭徹尾使わせる。教育を通して新しいイスラエル国民の統一的な意識を形成していくということには、非常に大きな期待がかけられていると思えます。さまざまな文化的背景を持って、皆帰って来ているわけなんですけれど、ここに新しいイスラエル国民としての意識を形成して行く、そのために教育というのは特別に重要な役割を期待されている、担わされているということができると思うのです。

### 普通小学校と宗教小学校

ところで、だんだん今日のテーマに入って行きたいと思うのですが、今これまで申し上げましたような、イスラエルの一般的な教育の状況の中でとくに注目されていると思われるのは、イスラエルの義務教育、初等教育の学校についてなんですけれど、イスラエルの初等教育学校、小学校とい

っていいと思いますが、八年間の小学校であります、これは、ほとんど全部が国が経営している国立の小学校であります。ごく一部分 independent なものがありますけれど、圧倒的に大部分の国立の小学校の中に、二種類の小学校があるということがイスラエルの教育を非常に特徴づけている。そしてまた、今日のテーマに関係してくるのであります。

この国立の小学校が、二つの種類のものに分けられるというのは、これはどういう種類のものかといいますと、一つは普通小学校 (General school)、国立の普通小学校といわれるもの、もう一つは国立の宗教小学校 (Religious school)、ユダヤ教による宗教小学校、この二種類に分れているです。それぞれ選択して入るわけですが、親の考えによってどちらかを選ぶのです。学齢期の子どもの、つまり義務教育年限の子どもの約四分の一が、この宗教小学校に入り、また宗派的な理由があって、とくに国との関係をもたない、国立でない independent な宗教小学校へ行っている子どもも合わせますと、だいたい三分の一が宗教小学校に行っているという、よその国では見られない特別な性格があります。

これは割合からいえば宗教小学校は三分の一と、普通小学校は三分の二ということですから、多数は普通小学校だということは確かなのですけれど、しかし、何といっても三分の一が宗教小学校に行っており、国の制度としてそれだけのものを維持しているというのは、この国の教育制度の大きな特色をなすものであるといわなくてはなりません。

教育史の観点からすれば、近代教育は、近代国家の教育は、宗教からの分離ということを原則としています。つまり、一般的に言って、近代国家の教育は宗教的ではなく、世俗的であることを特徴とするものです。そう

いうことから考えると、第二次大戦後に独立したまさに現代の新興国であるイスラエルが、このような比率で宗教小学校を国の制度としてもっているということは、まったく注目すべきことであるといえます。

ところで、この宗教小学校についてちょっとご説明しておきますと、そのカリキュラム、教育課程は、義務教育段階の学校ですから、一般の普通小学校と大部分は変わらないわけですが、普通小学校の課程の他に、ユダヤ教に関する教科という時間をもうける。だから、学校で勉強する時間は長くなっています。非常に有名な代表的な宗教小学校に行ってみたことがあるのですが、そこでは、子ども達を朝早くからユダヤ教の礼拝に参加させる、それが終わってから普通の授業に入るので、なんと学校の始まる時間が、朝の七時二〇分から始まる。朝の七時二〇分といいますと、われわれですと、朝食をとっているかどうか、まだ家を出てない時間ですが、その時間までに学校に行って、そして礼拝に参加し、それから授業に入ります。宗教小学校というのは、そういう点ではかなりきびしいことになるわけです。

この宗教小学校を覗いてみますと、われわれにとって、非常に奇妙な感じを受ける状況があります。それは、ユダヤ教の教会、シナゴグといわれておりますが、ユダヤ教の教会に入るのには、頭に何かのせていなければならぬという習慣があるのです。無帽あるいは頭を出したまま入ってはいけないという習慣になっております。わたくしどもシナゴグあるいは学校にある礼拝堂をみせてもらうために内に入ろうとすると、ちょっと待てといわれて、頭にのせる何かないかということになります。それでポケットからハンカチでも出してのせて、それから内に入って行くという

ことを求められるわけです。そういうこの習慣の延長だろうと思うのですけれど、宗教小学校では、学校の内で、教室の内で帽子をかぶっているというのは、別にとがめられないばかりでなく、普通のこととされているのです。運動帽のようなものをかぶって勉強している子どももいましたし、またべつところで、ソフトをかぶったまま授業をしている先生を見たこともあります。

ユダヤ教では、シナゴグの正規の座席のあるところには女子は入れないことになっています。男女の区別というのは非常にやかましくいうようとして、女子は普通に礼拝に参加する人の座席の外側、たとえば廊下にいるとか、あるいは二階の特別に設けられた席にいるとか、そういうふうに区別されているのですが、小学校にあっても、宗教小学校の場合には男女別学になっています。普通小学校は男女共学ですが、宗教小学校になりますと、そういうユダヤ教の教会に見られる習慣というようなものが守られておりました、学校でも女子の学校、男子の学校というふうになっているわけです。

そんなふうな宗教小学校というのが、相当な割合をしめているという点、これは他の国にみられないところです。とくに近代学校の制度が、教会からの分離、宗教と教育とがそれぞれ別個なものであるという、そういう制度が一般原則であるのに、イスラエルの場合には、義務教育段階で国立の宗教小学校というのをそのように維持していて、しかも、独特な教育をやっているということは、非常に注目されるべき特質だといえるわけです。

#### ユダヤ意識教育プログラム

ところで、最近の問題として、普通小学校と宗教小学校という二本建てで、多数は普通小学校に行っているのですが、この普通小学校をとくに対象にして、ユダヤ意識の教育に力を入れる特別なプログラム、ユダヤ意識教育プログラム（“the Jewish Consciousness Programme”）ということが、今から十年ほど前あたりから、一般の小学校を主として目標に導入されるようになってきました。宗教小学校については、とくにそういう点は問題にならないと思いますが、普通小学校にユダヤ意識を強調する教育を強化していくという動きが出てきたのです。

それはどういう趣旨のものかといいますと、これは、国会でいろいろな論議がありました。法律として定められることになったのですけれど、ユダヤ意識を学校の教育を通じて強化していくということなんです。

その趣旨をいくつか拾ってみますと、一つに、ユダヤ教の習慣についての知識をあたえ、またそれへの尊敬の態度を養うこと、というようなことを目的としているわけです。まだあげてみますと、パレスチナ以外の土地におけるユダヤ人の歴史。つまり、パレスチナの土地から追放されて行った、その散らばって行った処を Diaspora といいます。Diaspora のユダヤ人の歴史。ユダヤ人の歴史というのは、二〇〇〇年よりも前だとあのパレスチナの土地にユダヤ人の歴史があったのですが、それ以後は、世界中に散らばって行っているわけです。このパレスチナ以外のユダヤ人の歴史を教える。そして流浪のユダヤ人を特徴づけるころの精神的な輝きを

強調する、というのが“the Jewish Consciousness Programme”のねらいの重要な一つです。

それから、ユダヤ民族の文化的な遺産を摂取する、学習することを、一層強めていくとこの要求められています。また、現代のユダヤ人の生活を知らせる。これはイスラエルにいるユダヤ人のことではなくて、世界にまだ千何百万のユダヤ人がいて、そのうちイスラエルにいるのは二五〇万程度ですが、アメリカに一番多く、その他ソヴィエト、ヨーロッパ、アジア、アフリカ等のイスラエル以外の土地にいる現代のユダヤ人の生活について知らせること、そういうことをこの“the Jewish Consciousness Programme”は要求しているわけです。

さらに、イスラエルと世界各地に住むユダヤ人との間の運命的な相互依存について認識を高める学習を進めることなど、まだいろいろなことが、この“the Jewish Consciousness Programme”にはあげられておりませんが、ユダヤ意識というものを普通小学校の学習の課程で強調していこうという動きが、この一〇年位前からわかにか高まってきたのです。

これは、非常に大きな問題を含んでいるといえます。それは、とくにユダヤ教の習慣についての知識をあたえる、あるいはそれへの尊敬の態度を養うというようなことになりますと、宗教小学校の方では、これはもうまさにそういう教育、あるいはそれ以上の宗教教育をやってきていたわけですから、どちらかというと教の上では少数の方、しかし、他の国の教育の現代の制度からみればイスラエルに非常に特徴的であるこの宗教小学校の方に、普通小学校の教育をいくらか近寄せようという意味合いが確かにあるのです。そうなりますと、別個のものとしてこれまで発展してきました

たものに、そこに一つの共通なものを求めていこうという動きが、ここにみられるわけです。

何といっても、普通小学校の方に多数が通っているということは、イスラエルの国民の間に、かならずしも宗教小学校における教育をせひさせたという風には考えない人が、相当多いことをあらわしているわけです。それはある意味では近代的な考え方といってもいいかも知れませんが、それから、これは、イスラエルの現代の社会生活自体がかならずしも宗教的なものを求めていない、という状況ももちろん考えていいと思います。それにもかかわらず、この宗教小学校のともともっていたような教育の方向というようなものに近寄せようとする面を“the Jewish Consciousness Programme”は確かにもっているわけです。これは非常に大きな出来事であるということができるわけです。

## (2) イスラエル青年の意識

### ユダヤ教にたいするサブラの心情

それなら何故そういうことをやるようになってきたのか、非常に大きな、ある意味では教育改革といっているいいようなことをやるようになったのかといえますと、ここに、このイスラエルで生まれて、イスラエルで育った青年達の動向が原因になっているといわれます。イスラエルの現在の青年達の意識に対する一つのレスポンスとして、教育的な対策として、こういうやり方が学校に導入されるようになってきた、というように考えられ



ています。

それではどういうところに現代のイスラエルの青年達の問題があるのかといいますが、いわばイスラエル子(サブラとよばれる)ですね、よその国で育ったのではない全くのイスラエルで生れ育った青年達の意識には、Diasporaのユダヤ人との関係が非常に薄いのです。だいたい連帯感というものをもっていません。そういう青年達がいまや育ってきたわけなのです。よその国にいるユダヤ人というのは、他国の人のような気がするわけですね。自分達と共通の運命をもった、あるいは自分達と非常につながりの深い人々であるというような気持ちを、心情的にはもっともたないのです。自分らはイスラエルの子であるということなのです。

これはいろいろな問題があるわけですが、例としていろいろなことができています。たとえば、イスラエルの青年達が外国に遊びに行くと、そうすると外国にいるユダヤ人よりはむしろ他の国の友達、フランスに行けば、フランスにいるユダヤ人よりむしろその国の人(フランス人)の方に親近感をもってしまふといわれます。イスラエルの青年達が、いろいろな機会によその国に行くと、その国においてマイノリティー・グループ(少数派)として生活しているユダヤ人よりも、もともとその国の人である人たちに同質なものを感じる、ということなのです。

これは、非常に奇妙なことですが、どういうことかといいますと、現在のイスラエルで育ったユダヤ人(青年達)は、あまり宗教的な気持がない。あるいはほとんどない。ところが、ヨーロッパなり、アメリカなり、他の国においてユダヤ人としてまとまっているそれらの人々は、何といっても彼らを結びつける力というのは、ユダヤ教の信仰をもっているということ

です。そこで、むしろイスラエルの子達は宗教心をもっていませんので、ユダヤ教の信仰をもっているユダヤ人には、かえって違和感をおぼえるということなのです。そんなような非常に変なことが起っているというわけです。

これは、うわさとして流れて、あとで否定されたことなのですが、イスラエルの青年達が集団でアメリカに遊びに行つて、そしてクリスマスチャンになって帰つて来た、という話が伝わったことがあります。これはあとで否定されたそうですが、しかし大変にその話が広がって反響を呼んだというくらい、いかにもそれはありそうなことだと人々が考えていることをあらわしています。それからまた、青年平和友好祭で、モスクワを訪れたイスラエルの若者達の代表が、ソヴィエトにいるユダヤ人の組織と接触をしたことがあります。そこで、ソヴィエトにいるユダヤ人の組織の人は、イスラエルから来た青年達をシナゴグに案内した。ところが、案内されたイスラエルの青年達は、このように告白したといわれています。

「僕は生まれてはじめてシナゴグをみた。ここでも、教会に入つて行って祈禱書を渡されても、どうやって扱つたらいいかとまどつた、というような話がいわれるくらい、今のイスラエルの青年達というのは、ユダヤ教と無縁の若者として育つてきたことがあるわけです。

こういうことは、非常に political な意味でありますけれど、イスラエルの為政者にとつては由由しき事だと感じられています。そこでどうしたらいいのかということですが、さりとしてにわかにな宗教教育をやれということとはむづかしいわけですね。学校に宗教教育を導入することを好まない、という考え方も一方では非常に強いのですから。現代のイスラエルの

社会、これはやはり何といってもそういう点で、よその国と同様に近代社会としての性質をもっていているわけですから、普通小学校に行っている人が多いということは、学校に宗教教育をかならずしも望まない人々が多いということであらわしております。ですから、宗教教育をいきなり持ちこむということはできないのです。

しかし、何とかしてこの Diaspora のユダヤ人との連帯性というものを果たせなければならぬという要請と、それからイスラエルという国が一九四八年に再建されたのですが、新しい生まれたばかりの国だというだけではなくて、やはり、国際的な国の威信としては古い文化をもった伝統のある偉大な国なのだという誇りをもたせる、あるいは為政者としても、そういう信念で、国の事を考えたいという態度を持ちたいわけです。ところがイスラエルの古い文化、歴史というと、これはユダヤ教と切り離して考えるわけにはいかない。そういうジレンマがあるということになります。

そこで、この普通小学校に“the Jewish Consciousness Programme”を実施するにあたっては、随分いろいろな言いがれをしながら、宗教教育ではないんだということを、いろいろ細心な注意をくばって説明しながら、しかし、何といってもイスラエルの文化遺産、精神的な伝統というと、ユダヤ教を抜きにしてはいえないわけですし、ユダヤ教の諸習慣に関する知識、あるいはそれへの尊敬の態度を養うということを求めざるを得ないという、非常にむづかしいことを持ちこむことになったのです。

#### ディアスポラのユダヤ人との連帯

先程言いましたように、何といっても現在のイスラエルは、世界各地に散らばっているユダヤ人との連帯なしには、維持していけないという面があります。これは、political に言ってもそうであります。あの小さな国が現在のところそう資源的に恵まれているのでもない、労働力も多くないあの国が、まわりの圧倒的に多くの人口をもつアラブとの緊張関係の中で維持していくためには、世界各地からのユダヤ人の応援というものがなくてはいけないという、さしせまった要請があります。

世界各地に散らばっているユダヤ人が、イスラエルを応援するというのは、何も直接にイスラエルに物や金を送るということに限りません。たとえば、アメリカにいるユダヤ人、これは相当な勢力です。とくにニューヨークでは、何百万というユダヤ人がいるといわれておりますが、ニューヨークの市長の選挙、あるいは大統領選挙の場合等にも非常に大きなまとまった票として、候補者にとって大きな pressure になっているわけです。そういう力を背景に外交的にイスラエルに対する援助というものを、アメリカにたいして要求するということが、そういう約束をとりつけて投票するという動きもできるわけです。このように、いろいろな現在のイスラエルを維持・発展させるために、Diaspora にいる Jew との連帯ということは、欠くことのできない要素になっているのです。

ところが Diaspora にいる Jew というのは、何故ユダヤ人であるのかというと、まさに宗教的な理由によってユダヤ人であるといわれる。だい

たいもう、生物学的に言えば十何世代も経過してきていけば、すっかりまじってしまったていて、見るからにドイツ人ようになっていたり、スラヴ人のようになっていたり、あるいはフランス人ようになっていたり、すっかりその血の中にまで、よその国の民族の間に入っているわけなのですけれど、それにもかかわらず、彼等が「*ゴキ*」といわれるのは、ユダヤ教の信仰をもっているということで区別されている。ところが、それとの連帯を必要としているイスラエルにおいて、イスラエルの若者達が宗教心をもたないということになりますと、ちっとも外のユダヤ人に共鳴するところが無い。連帯感をもたない。ユダヤ教の信仰をもっていれば、世界各地に散らばっている同じ信仰をもつ者という連帯感があるわけですが、そういうものが全然ない。

しかも、ヨーロッパなりアメリカなりに暮らして帰ってきているユダヤ人ですと、これはそれらの国々にいるユダヤ人と一緒に生活した経験をもち共感するものはあるわけですが、つまり、迫害された共通の経験を持ち、自由を拘束されたり、少数グループとして圧迫されてきたつらい経験をもつとももっているということで、共感できるのですが、イスラエルに生まれてイスラエルで育った青年達は、迫害の歴史というものを自ら経験しているわけでもないし、社会の中における少数グループであるという状況におかれたこともないし、全く心情的に共通するものをもたない。そういうことが非常に困ったことだというふうに考えられるわけなんです。イスラエルの現在の国際的な状況の中で、とくに国家的な要請として青年達のそういう意識というものは、非常に大きな障害であるというふうに受け取られるのです。

この青年達を結びつける気持は、むしろ、我々はイスラエルで生まれたのだ、それからヘブライ語を話すのだ、ということでの青年達は共通の「我々は結ばれている」という気持をもつでしょうが、外にいるユダヤ人とはいかなる意味においても、どうも心情的に結びつけない。ちょうど日本でも戦後に生まれて戦後育った青年達は、戦争経験というものがないから、戦争経験をもっている日本人のその世代と、そこに一つの考え方の断絶があるということがよくいわれますが、同じような世代の違い、しかももっと深刻なイスラエルにおけるこういう青年達の世代についての大きな問題というのが、ここに浮かび上がってきたのです。イスラエル国家が建設されて、そういうことが大きな社会的な問題であることが、明らかになってきたわけです。

### (3) Zionism と Judaism の矛盾

#### 思想的背景

そこで話をしたいにまとめていきたいと思います。実は現在のイスラエルの青年がそのような意識をもっている、つまり、Diaspora の Jew とは無関係であるとか、あるいは宗教的な気持がない、ユダヤ教に何らの関心ももたないというようなことは、これは何も世代的な理由によるだけではない。もともとイスラエル国家を再建するための今世紀初頭以来、あるいはすでに前世紀後半からのシオニズム (Zionism) の運動のなかに、そしてそうした運動と関係があるのですが、近代ヘブライ文学の思潮のな

かに、青年たちの意識をしてそのようにさせものがふくまれているということがあるのです。つまりそうした運動のなかに、ユダヤの伝統を拒否する anti-jewish な、anti-religious なものがあって、その背景が現代の青年たちの意識の形成に大きく作用しているということが指摘されています。

イスラエル国家の再建のそもそもの根底に、精神的土壌として anti-jewish なものがあるとすれば、これはかなり根本的な問題であるといえます。そこで、そのような思想的背景について申しあげる必要があると思ふのです。

いったいシオズムと いうのは、ご存じの方もおられると思いますが、かんたんにいえば、世界中に離散したユダヤ人が、エルサレムの聖地シオンの丘によって象徴される故国パレスチナに復帰しようとする観念および運動をいうのです。そこでこの運動は、Diaspora の Jew であるということを決定的に拒否するという、そこから出発している。つまりパレスチナ以外の土地に散らばっているということを拒否して、パレスチナに帰って来ようというわけですが、その際に各地に散らばって、そこで古いユダヤ教の伝統的な教義というものを守って、そしてそれぞれの社会で非常に圧迫された少数のグループとして暮らしているユダヤ人のコミュニティがあるわけですが、ヨーロッパではゲットーなどといってユダヤ人だけが特別限られた地区で生活していたようなことがありましたが、そういう状態でユダヤ人が生活していることを拒否する、それから出発しているわけです。

シオニズムは、ユダヤ人の全く新しい社会をパレスチナの土地に造ろう

ということでのこの運動は発展してきました。しかも、一九世紀中葉以降のナシヨナリズムの勃興と、そしてヨーロッパの社会主義的な運動、労働を尊び、平等という社会正義の実現をめざすソシアリズムの運動と密接に結びついて発展してきました。ですから、皆さんご存じと思いますが、キブツなどという非常に共産主義的な生活形態をシオニズム運動の一つの象徴として、パレスチナにそういう生活形態を作っていたりしているわけですが、そういうことからもわかりますように、イデオロギー的には社会主義の思想と陰に陽に結びつきながらこの運動は展開されていたわけです。なおご承知のように、マルクスもユダヤ系のドイツ人であります。

そういう考え方の中に、ユダヤ人の生活の背景からくる、たいへん特徴的なものがみられます。ユダヤ人はよその国へ行きますと、だいたいユダヤ人といえますと、シェイクスピア劇で有名なシャイロックなどのように金貸しになるとか、商人になるとか、あるいは学者なども随分いたわけですが、その他いやしい仕事など、ユダヤ人の就きうる職業は非常に限定されていました。特に土地を持って農民になるということは、許されなかったわけですね。ところが、一つの民族の生活の仕方としてやはり大地に足を踏みしめて、そこに大地を対象に労働するという生活がない民族というのには、これはノーマルな民族ではないという考え方があります。特にユダヤ人はよその国へ行っている。そしてこれはどの民族でもよその国へ行って少数グループになりますと、金だけがたよりというような状況に追い込まれるのは、容易に想像できることでありまして、これは他国から来て日本に住んでいる人達についても、同様なことが認められると思えますけれど、そういう生活の姿勢を余儀なくされてきたわけです。そういう生活

の仕方ではなく、やはり労働というものを、これを人間の生活の中心におき、また大地と取り組むという、そういう生活を含むものでなければ、健全な一つの民族の社会生活の形態ではないというような、そういうノーマルな民族としての生活を求める思想がシオニズムには含まれております。

そういう思想は、これはシナゴグのユダヤ教の礼拝のなかからは出てこない。あるいはまた、散っていった人達が非常に圧迫された生活の中で、ある意味で宗教的な観念の生活に逃避するという傾向があったといっ  
てよいと思いますが、そうした傾向からむしろ脱出するために、宗教（ユダヤ教）というものを拒否するという姿勢がシオニズムには含まれている。ですからこのイスラエルの熱烈な愛国者で現在のイスラエルを造り上げていった人びとの中には、それはもちろん敬虔なユダヤ教徒で、ユダヤ教の発生の地シオンの丘に帰りたいということでも来た人もいるわけですが、しかし熱烈な愛国者すべて敬虔なユダヤ教徒というのではなく、一方では、ユダヤ教に限らずキリスト教でも仏教でも回教でもいいさ宗教というものに関心をもっていない、そういうものは必要としないということさえはっきりいう愛国者がいるわけです。

しかし彼は彼なりにユダヤ人の正常な社会生活が営める国の建設というものに挺身して、パレスチナが英国の委任統治領であったとき、独立のための反英運動等をやって投獄されたりしている。そういう経験をもって  
いる者などが随分いるわけですが、このシオニズムの運動からわかるように、はっきり反宗教的な、あるいは宗教には関心をもたないという人がむしろ主流ではないかと思われるのです。こういう背景があって現在のイスラエルの再建ができたということを考えると、たんに青年の世代の

Diaspora に対する無関心が世代的な理由ばかりによるのではなく、やはり今のイスラエル国家建設の主要な力になったシオニズムの運動の中に、思想的に、すでに反宗教的なあるいは非宗教的なものが含まれているということがきわめて重要な意味をもつことがわかります。だから、Zionism と Judaism は併存できないんだとさえいう人がいるくらいです。

そういう背景がありながら、しかし一方においてさきほどいきましたように、Diaspora の Jew との連帯ということが political な面において必要であるし、それからまた、この国の威信として、最近できたばかりの駆けだしの国ではないのだ、昔からの由緒ある国であり、長い文化的な伝統というものを保持してきた国なのだという国の威信にかけても、やはりユダヤ教を中心に長い間に築き上げてきた様々の文化的価値というものを評価するという、そういうことをせまられている、そういう矛盾ははっきりしてきたことができると思うのです。

#### ユダヤ意識教育の進め方

ところで、この “the Jewish Consciousness Programme” (ユダヤ意識教育要項) の進め方として、これは宗教教育ではないと一方で言いますが宗教的なものをとりあげざるをえないわけですから、いったい宗教教育でないというのはどういう風にしてそれを説明するのか、ということがあります。そのばあい、ユダヤ教に関するインフォメーションを与えるのだというようなことで、大変苦しいのですけれど、知識を与えるのだ、ユダヤ人民の歴史についてその事実を教えるのだという言い方ですね、いろいろ

るのユダヤ人の過去の歴史、それからユダヤ教の様々な教えについて、これを生徒達に伝えていくということで、何とか合意が成立しているわけだ。

しかしこうした弁解は両派から攻撃されることでして、つまり *Zionist* の方から言わせれば、学校に宗教教育を持ち込むものだとして批難されるし、それから非常に敬虔なユダヤ教の立場に立つ人々からは、生半可な *the Jewish Consciousness Programme* なんていうのはやめて、はっきり宗教教育をやれという風に、これは大変板ばさみにあっているわけなのですが、しかし何といてもこの国民的な統一とそれから外のユダヤ人との連帯というような要求を考慮に入れると、いかなる形においてもせよやはりユダヤ教というものを抜きにしては、どうもそういうユダヤ意識というものを高めていくことはできないということなのです。

ですからまとめていえば、傾向としてたしかに現在のイスラエルには宗教的なものに逆らう傾向というものが、はっきり一方においてはあります。しかしイスラエル国家の存立というナシヨナリズムの立場から、これは何らかの民族的な伝統というものにとらざるを得ないということが言えるわけです。それで、その民族的な伝統というと、これはユダヤ教を抜きにしては、どうもそれを見出すことはできない。そこで宗教的ではないといながら非常に苦しいわけですが、“*the Jewish Consciousness Programme*” というものをもちこんで、矛盾はあるわけですがそこを妥協的につみこんで学校の教育の中でやっつけていこうとする。

ですから“*the Jewish Consciousness Programme*”の導入によって、いままでよりもバイブルを読む、あるいはタルムード（昔の古いユダヤの

生活の慣行などを書いたばう大な文献）を教材として採り上げる時間がぐんと多くなってきたわけです。いったいこれは宗教教育としてやるのかと尋ねると、そうではないと学校としては答えるのです。これは、バイブルの教育というのは、我々にとっては文学の教育であり古代史の勉強なのだというわけです。歴史であり、それから文学の勉強であって、宗教の時間ではないのだという言い方をします。たしか戦争中日本でも、古事記や日本書紀等について、これを教材として採り上げることが学校で行なわれたわけですけれど、そういう場合にはやはり建て前としては、宗教教育というようなことではなかったと思います。これは歴史の勉強の一環であり、あるいは日本の古代文学の典型的なものとしてそれを扱うということであったと思いますが、同じような説明をつけているわけです。

あるいはこの *Diaspora* の *Jew* への関心を高めるといふようなことで、地理の時間に世界地図を描かせて、そして *Jew* といわれる人が、どのくらいどの国にいるかというようなことを、書き入れさせたりしている場面に出会ったこともあります。その際ちょっとおかしかったのですけれど五年生か六年生ぐらいの教室なんですけれど、教室の床に大きな紙をしいて、そこに世界地図を皆で共同作成するのです。めいめいが分担してユダヤ人が何十万人いる、何百万人いるという印を入れていっているわけです。その世界地図をずっと見ましたら、どう見ても日本がないんですね。そこで先生に耳うちして日本がないぞと言ったら、その先生はにやっと笑いまして、日本にはあまりユダヤ人はいませんでしたからね”ということをお話を言われましたが、つまり日本は非常にその点でめずらしい国ですね。ユダヤ人が住みついたということはない、集落をなして住みついたというこ

とはない。ユダヤ人は世界中に散らばったのですけれど、日本には「ロシアの方から追われてアメリカへ行く」という時に日本を通過しては行きましたけれど、日本に住みつくという事はなかったのです。

そんなこともあって日本では「*the Jew*」に対する偏見というものはあまり強くない。それでユダヤ人（イスラエル人）は、日本にはうらみはもっていないし、割に好感をもっている。特にロシアから追われて、あるいはシャーンハイあたりから追われてアメリカに移って行く途中日本を通ったとき、いろいろな親切なあつかいを受けたというようなことを、感謝しているという話をよく聞きました。この間も新聞に出てましたが、第二次世界大戦のころに、バルト三国かどこからユダヤ人が逃げ出そうとしたときに、日本の領事館がどんどんビザを出して助けてやったというので非常に感謝されているというような話が紹介されましたけれども、そういった、これは余談になってしまいましたが、世界地図を描き、そういった勉強しながら *Diaspora* の *Jew* との連帯というようなことを考えさせているということをやっています。

特にユダヤ人の歴史というものを学ばせることを通じて、そういう外にいるユダヤ人との連帯意識というものを高めていこうということを考えているようです。というのは、ユダヤ人の歴史は、ずっとあのパレスチナの土地にいて続けているというものはなく、二千年前に歴史展開の場所が変ってしまうわけですね。そういう国の歴史というのは、あまりないんじゃないかと思いますが、よその国にいたユダヤ人の歴史ということになっていくわけです。そういう非常に特殊な歴史があるわけです。そういった歴史の教育を特に重点的に力を入れてやっていこうということとは、“the

Jewish Consciousness Programme”の学習の進め方の例であります。

そんなようなことで、日本でも戦後、歴史教育の扱いについて非常にむづかしい問題があって、戦後ある意味では歴史教育というのは、特に国史の教育というのは扱いにくい教科であったといえますけれど、最近いろいろ歴史、国史の教育の中で、神話を復活させるとか、いろいろなことが試みられようとしておりますが、その際にやはり日本で国史の教育が行なわれるということは、どういう意味をもつか、そういったようなことを改めて我々は考えなくてはならないと思います。イスラエルにあっては、イスラエルのこういう特殊な状況の下で、ユダヤ人の歴史というものについて、これの教育を強化していこうということが行なわれていることをつけ加えておいて、一応、私の話を終りたいと思います。

#### 参 考 文 献

- Kurzweil, Zvi E. *Modern Trends in Jewish Education*. New York, 1964.
- Avidor, Moshe. *Education in Israel*. Jerusalem, 1957.
- Shumsky, Abraham. *The Clash of Cultures in Israel*. New York, 1955.
- N・ペントウィッチ『再建のイスラエル』（小林正之訳）、早大出版部、一九六〇年
- 倉内史郎「ユダヤ意識教育要項」ほか——アジア・アフリカとヨーロッパの接点で——「ユダヤ・イスラエル研究」創刊号、一九六一年